



平成24年9月7日

乳幼児の窒息や誤飲に注意！！

～繰り返し起きている乳幼児の窒息・誤飲と電池の誤飲の危険性～

今年7月に他県でおやつにより、乳幼児が窒息する事故がありました。

東京消防庁管内¹⁾では、平成19年から平成23年²⁾までの5年間に日常生活の事故で約43,000人の乳幼児³⁾が救急車で医療機関に搬送されています。

そのうち、窒息や誤飲などで5,739人の乳幼児が救急搬送されており、その原因は食品、玩具、タバコなど多岐に渡っています。

乳幼児の窒息や誤飲は、毎年同じように繰り返され発生し、ボタン電池など飲み込んだものによっては、体の組織を破壊するなど重大な事故となる恐れもあります。

窒息や誤飲は、保護者等の見守りや安全な環境づくりにより事故を減らすことができます。

子どもの健やかな成長のため、窒息や誤飲の危険性を再確認し事故を未然に防ぎましょう。

- 1 乳幼児の窒息や誤飲の事故により、過去5年間で5,739人が救急搬送されています。
- 2 乳幼児の窒息や誤飲の事故の9割以上が、住宅等居住場所で発生しており、17時台から21時台で多く発生しています。
- 3 0歳児と1歳児で多く発生し、年齢とともに減少しています。
- 4 関連器物別で多いのは、食品、玩具、タバコです。
- 5 日用雑貨等の窒息・誤飲の中で多いのは電池で、84人が救急搬送され、1歳児が最も多く救急搬送されています。

詳細は、別添え資料をご覧ください。

備考

- 1) 東京都のうち稲城市、島しょ地区を除く地域（東久留米市は平成22年4月1日より東京消防庁管内）
- 2) 平成23年中は暫定値
- 3) 0歳～5歳

東京消防庁では、今後も同様の救急事故の発生状況を注視し、注意を促すなど、都民の安全確保に努めてまいります。

問合せ先

東京消防庁（代） 電話 3212 - 2111
防災安全課防災安全係 内線 4206
広報課報道係 内線 2345～2349





乳幼児の窒息や誤飲に注意



平成19年から平成23年までの5年間に東京消防庁管内で、日常生活の事故により約43,000人の乳幼児が救急車で医療機関に搬送されています。

そのうち、窒息や誤飲などで5,739人の乳幼児が救急搬送されています。

飲み込んだものによっては、体の組織を破壊するなど重大な事故となる恐れもあります。

乳幼児の窒息や誤飲は、毎年、同じように繰り返して起きています。発達にともなって、あなたのお子さんにも、同じような事故が起こる可能性があります。子どもの健やかな成長のため、窒息や誤飲の危険性を再確認するとともに窒息や誤飲の予防を考えましょう。

1 乳幼児の窒息・誤飲による救急搬送状況

窒息や誤飲の事故で救急搬送された乳幼児は、毎年1,000人前後で「落ちる事故」や「転ぶ事故」に次いで、発生頻度が高くなっています（図1）。

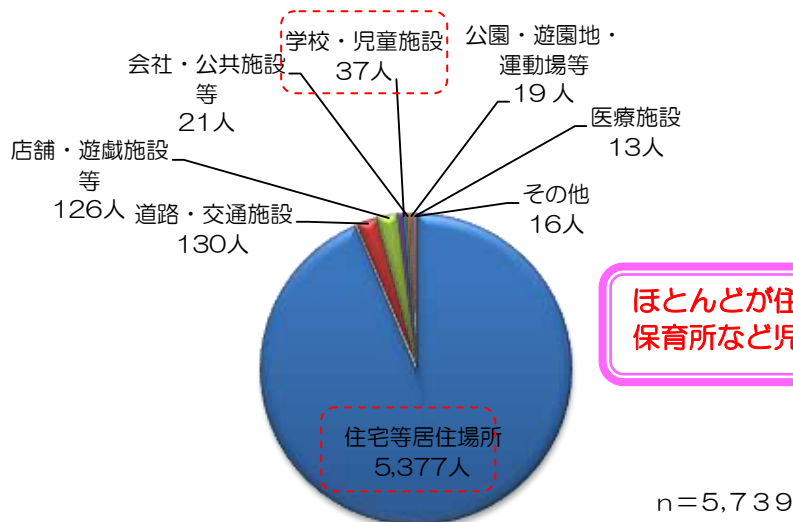
1日平均3人の乳幼児が、救急車で医療機関に搬送されていることとなります。



1日平均3人の乳幼児
が救急車で・・・

図1：年別の救急搬送状況

救急要請時の場所では、住宅等の居住場所が全体の9割以上を占め、次いで道路や駅などの施設となっています（図2）。



ほとんどが住宅等だが・・・
保育所など児童施設でも発生！！

図2：発生場所別の救急搬送状況

救急搬送の時間帯別では、17時から21時までの発生が多くなっています（図3）。

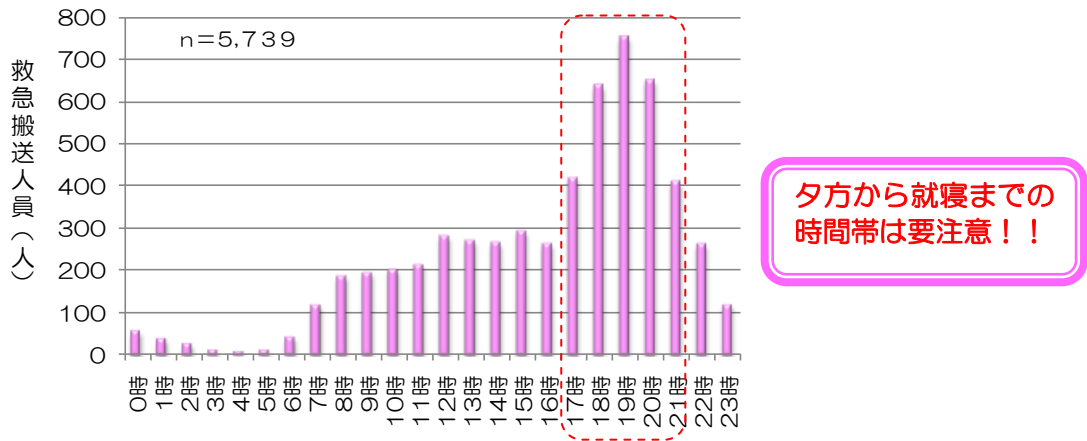


図3：時間帯別の救急搬送状況

医療機関への搬送時の初診時程度では、9割以上が軽症ですが、427人の乳幼児が入院を必要とする中等症以上と診断されています。

また、36人は生命に危険がある重症以上と診断されています（図4）。

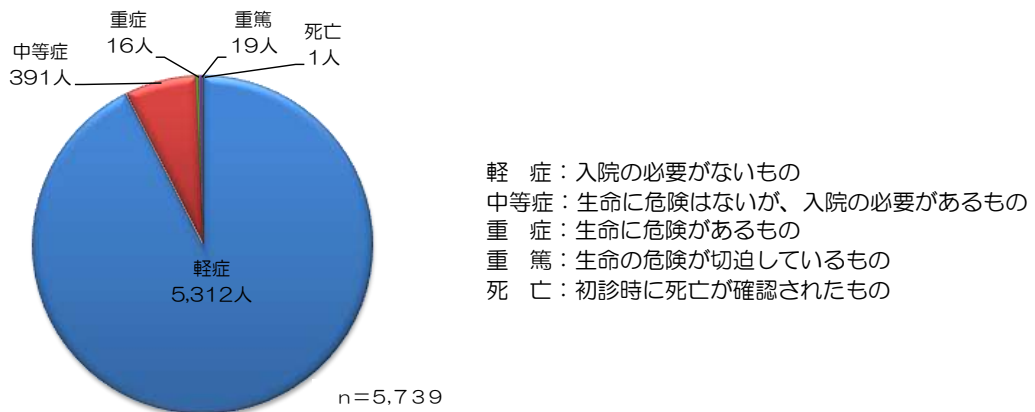


図4：初診時程度別の救急搬送人員

年齢別では0歳児が最も多く、成長とともに搬送人員も減少しています（図5）。

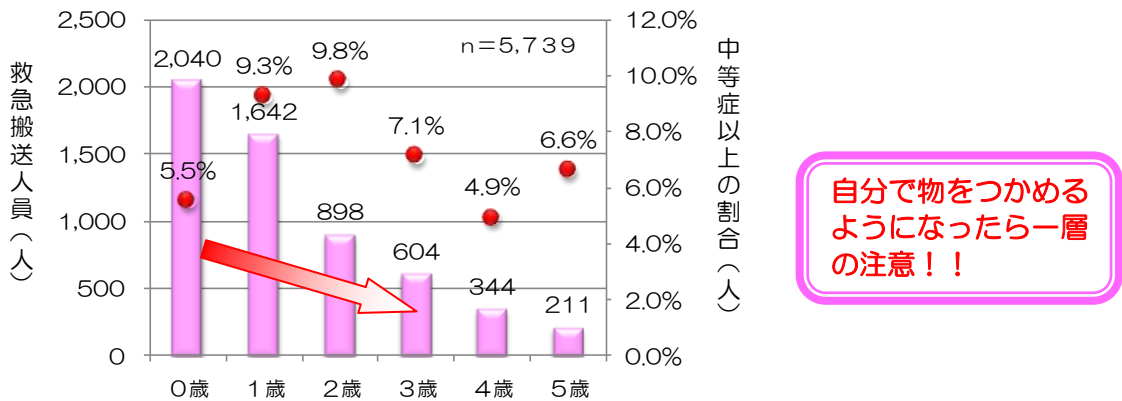


図5：年齢別の救急搬送人員と中等症以上の割合

窒息や誤飲に係る製品等では、食品が最も多く、玩具、タバコと続いています（図6）。普段も気を付けている食品や玩具以外にも、乳幼児が窒息や誤飲しているものは様々であり、中でも電池や灯油などは体の組織を壊したり肺炎を起こす危険があります。

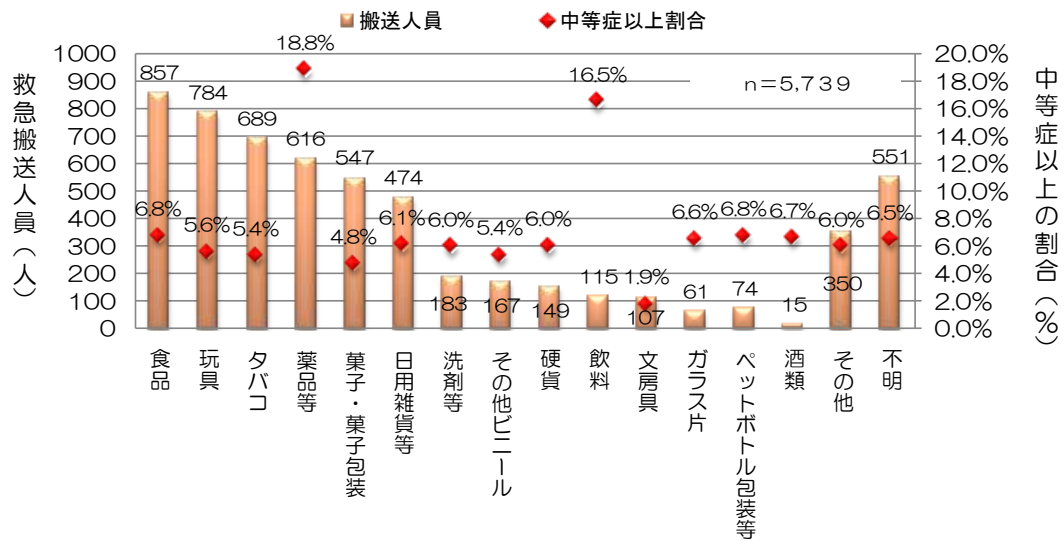


図6：関連器物別の救急搬送人員

重症または重篤と診断された事故事例

(医療機関に救急搬送時の初診時程度)

【プチトマトで窒息】

1歳女児が食事中にプチトマトをそのまま飲み込んでしまったため、呼吸ができず、ぐったりしてきたため救急要請した。【重篤】

【スーパーボールで窒息】

0歳女児が自宅居室内でスーパーボールを飲み込み、苦しんでいたため救急要請した。【重篤】

【ゴム風船で窒息】

2歳男児がゴム風船を誤飲し、呼吸困難となったため救急要請した。【重篤】

【ピーナッツの誤飲】

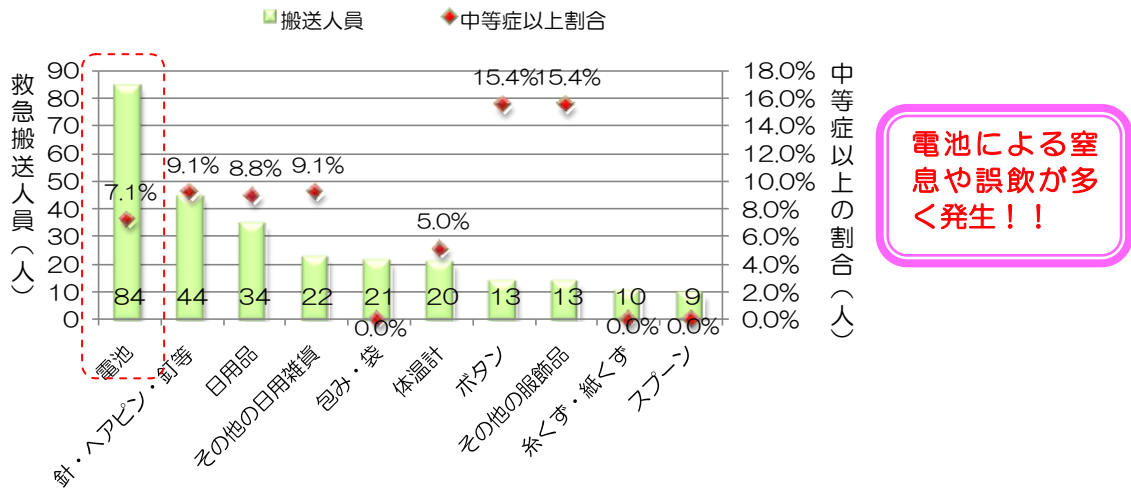
2歳男児がピーナッツを口に入れたままジャンプをして遊んでいたところ、誤飲してしまい救急要請した。【重症】

【薬品の誤飲】

家族が目を見離した間に、1歳男児が祖母の血圧の薬を食べてしまい、あたりを見ると空のパッケージがあったため救急要請した。【重症】

2 電池の意外な危険

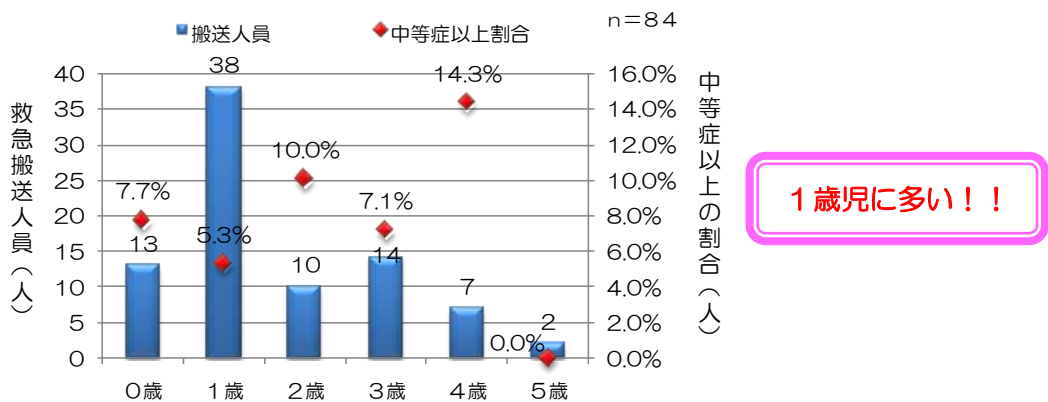
図5の日用雑貨品等の内訳を見てみると、電池が最も多く、次いで釘やヘアピン等が多くなっています。電池での窒息や誤飲の多くはボタン電池で、リモコンや玩具など日常生活の中で多く使われています。最近では、大きくて薄く電圧の高いリチウム電池も多く使用され、窒息の危険だけでなく、誤飲により食道内にとどまると、体の組織を腐敗させるなどの危険があります（図7）。



電池による窒息や誤飲が多く発生！！

図7：日用雑貨品等に関する器物上位10

年齢別に電池での窒息や誤飲をみてみると、1歳児が38人と最も多く救急搬送されています（図8）。



1歳児に多い！！

図8：年齢別搬送人員と中等症以上割合（電池の窒息・誤飲）

発生場所では、そのほとんどが住宅等居住場所で発生しています（図9）。

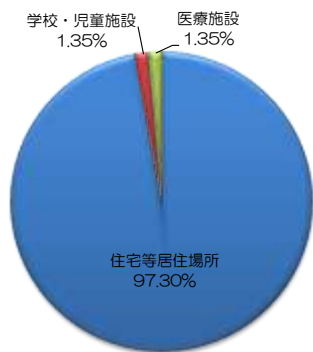


図9：発生場所別割合（電池の窒息・誤飲）

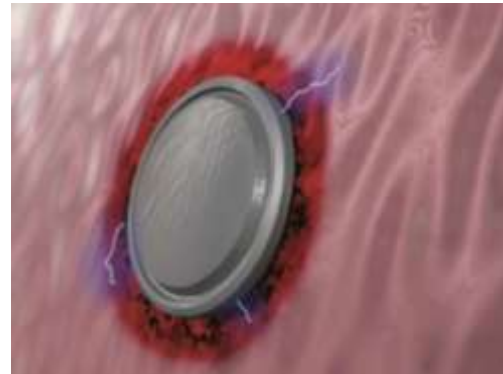
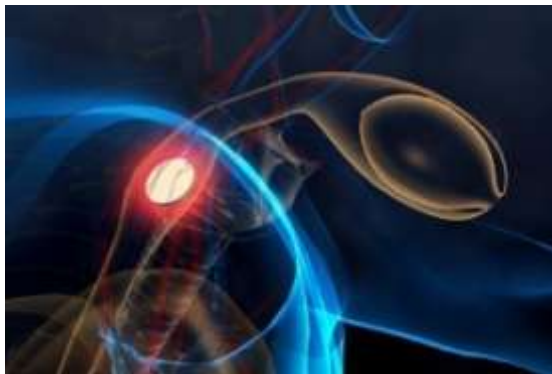
ボタン電池誤飲の危険性

電池は危険と感じていても、なぜ危険なのか知らない人も多いのではないでしょうか。飲み込んだ電池が胃の中に入ってしまうと、それほど危険性は高くありませんが、食道にとどまると、たいへん危険です。分単位で食道の粘膜がただれはじめ、中には大動脈まで穴が開いて死亡することもあります。

乳幼児がボタン電池を誤飲した時に食道で何が起きているか、独立行政法人産業技術総合研究所が映像化したものです、映像を見て危険性を理解してください。



- 1 子供がテーブルの上のブロックを取ろうとして、そばにあったリモコンを床の上に落としてしまいます。
- 2 落ちた衝撃で、リモコンの蓋が開いてしまい、中のボタン電池が床に散らばってしまいます。
- 3 子供の興味は、ブロックからボタン電池に変わり、ボタン電池を口の中に入れてしまいます。



- 1 飲み込んでしまったボタン電池が、食道内の壁面に張り付いてしまいました。
- 2 食道内の壁面に張り付いたボタン電池の電流により、組織が腐敗されています。この状態が続くと、潰瘍などができ組織を侵食していきます。


独立行政法人
産業技術総合研究所

【映像提供】

乳幼児の窒息や誤飲を防ぐために

今回の救急搬送状況みると、以前から報告している傾向等とほとんど同じです。すなわち、同じ月齢・年齢の子どもが、同じ誤飲や窒息を起こしているということです。

乳幼児は、日々、発達しています。昨日できなかったことが、今日ではできるようになります。「まさか、うちの子に限って」ではなく、「ひょっとしたら、うちの子も」と認識する必要があります。

○ 6ヵ月になったら、何でも口に入れるようになります。

誤飲や窒息が始まる時期を知っておく必要があります。早い子では、5ヵ月から「物をつかむ」、つかんだら「口に入れる」行動が見られます。それ以降、何でも口に入れるのは1歳2-3ヵ月までのお子さんです。

わが国では、床の上に物を置く生活のため、乳児の誤飲の発生率は高いのです。

乳幼児はトイレトペーパーの芯(39mm)を通る大きさのものなら、口の中に入れてしまい飲み込む危険性があります。

また、小さなビニール片でさえ、のどに詰まらせてしまう事があります。

○ 危険性が高いものは何かを知っておきましょう。

乳児がティッシュペーパーを口に入れていた、というような状況は100%起こるといっても過言ではありません。誤飲したものの多くは、危険性は高くありません。しかし、いくつか危険なものがあります。覚えておいてほしいものは3つです。

①ポタン電池

飲み込んだ電池が胃の中に入ってしまうと、それほど危険性は高くありませんが、食道にとどまると、たいへん危険です。分単位で食道の粘膜がただれはじめ、中には大動脈まで穴が開いて死亡することもあります。

②灯油

水と間違えて飲み込むことがあります。胃から逆流すると、灯油の蒸気が気管から肺に入り、ひどい肺炎を起こします。

③キャンドル・オイル

色がついていることが多く、飲み込む子があります。これも灯油と同じ状況で、肺炎を起こします。

○ 年齢に応じた大きさや形状にして食べさせる、びっくりさせない。

乳幼児は、大きな食べ物を丸飲みしたり、びっくりして飲み込んでしまい窒息することがあります。

成長段階に応じ、食べ物は適切な大きさに切る、つぶすなどして食べさせ、食事中に大きな声で呼ぶなど乳幼児をびっくりさせるようなことはやめましょう。

また、歩きながらや寝ながら食べさせることもやめましょう。

監修：緑園こどもクリニック院長 山中 龍宏

乳幼児の成長

- ① おねんね期（生後～3、4ヵ月頃）
寝がえりをする前のこの時期は、自分で危険に向かっていくということはありませんが、危険が迫っていても逃げることができず、とても無防備な時期です。
この時期は、親の不注意による事故に注意が必要です。
- ② 寝がえり期（3、4ヵ月～5、6ヵ月頃）
寝がえりができるようになると、身近にあるものに手を伸ばし口に入れるようになります。しかし、自ら危険を避けることはできません。
- ③ はいはい期（5、6ヵ月～1歳頃）
はいはいが出来るようになると、行動範囲も広がり、目についたものに自ら移動し、手につかんで口に入れるようになります。しかし、危険なものの判断ができず、言葉で注意しても理解できません。
- ④ 歩く期（1歳～2、3歳頃）
歩くことが出来る時期には、手先を器用に動かせるようにもなり、大人の真似をするようになります。
しかし、周囲の危険を察知したり、危険を判断できません。
- ⑤ 何でもできる期（4、5歳～）
何でもやりたがる時期で、追いかけたり、高い所に上がったたり、飛び降りたりできるようになります。
しかし、危険に対する判断力はまだ不十分で、一度にひとつのことしか、注意を向けられません。

参考文献

「子どものケガ・事故予防救急ブック」
（株式会社ほんの木 監修：山中龍宏）